

道成寺

觀阿弥作

前

ワキ 道成寺の住僧

狂言二人 道成寺の能力

ワキヅレ 同じく伴僧

シテ 白拍子

後

ワキ 前に同じ

ワキヅレ 前に同じ

シテ 蛇身

季は 地は
三月 紀伊

「是は紀州道成寺の住僧にて候。さても当寺に於て
さる子細有つて。久しく撞鐘退転仕りて候ふを。
此程再興し鐘を鋤させて候。今日吉日にて候ふ程
に。鐘の供養を致さばやと存じ候。いかに能力。
はや鐘をば鐘楼へ上げて有るか。

狂言
「さん候はや鐘楼へ上げて候ふ御覽候へ。

狂言
「さん候はや鐘楼へ上げて候ふ御覽候へ。

ワキ
「今日鐘の供養を致さうするにて有るぞ。又さる子
細ある間女人禁制にて有るぞ。かまひて一人も入

れ候ふな。其分心得候へ。

狂言
「畏つて候。

シテ次第

「作りし罪も消えぬべし。く。鐘の供養に参らん。

サシ
「是は此国のかたはらに住む白拍子にて候。

詞
「さても道成寺と申す御寺に。鐘の供養の御入り候
ふ由申し候ふ程に。唯今参らばやと思ひ候。

道行

「月は程なく入りしほの。く。煙みちくる小松
原。急ぐ心かまだ暮れぬ。日高の寺に着きにけり。

く。

詞「急ぎ候ふ程に。日高の寺に着きて候。やがて供養

を拝まうするにて候。

狂言「如何に是なる女人何くより参られたるぞ。供養の庭へは叶ひ候ふまじ。

シテ「是は此国のかたはらにすむ白拍子にて候。鐘の供養にそと舞をまひ候ふべし。供養を拝ませて賜はり候へ。

狂言「尤拝ませたく候へども。何と思し召し候ふやらん。

供養の庭には堅く禁制と仰せ出だされて候ふ去りながら。某の心得を以て拝ませ申さうする間。面白う舞まうて御見せ候へ。折節是に烏帽子の候。之を召して御舞ひ候へ。

シテ「荒うれしや涯分舞をまひ候ふべし。うれしやさらば舞はんとて。あれにまします宮人の。烏帽子をしばし仮に着て。既に拍子を進めけり。

次第

「花の外には松ばかり。く。暮れそめて鐘や響く

らん。(乱拍子)

ワカ
「道成の卿承り。始めて伽藍橋の。道成興行の寺な
ればとて。道成寺とは名づけたりや。

地
「山寺のや。(急の舞)

シテ
「春の夕ぐれ来てみれば。

地
「入相の鐘に花ぞ散りける。花ぞちりける。く。

シテ
「さるほどにく。寺々の鐘。

地
「月落ち鳥鳴いて霜雪天に。満汐ほどなく日高の寺
の。江村の漁火愁に対して。人々眠ればよき隙ぞ
と。立ち舞ふ様にてねらひよりて。撞かんとせし
が。思へば此鐘恨めしやとて。龍頭に手をかけ飛
ぶとぞみえし。ひきかづきてぞ失せにける。(中入)

狂言
「落ちてござる。

ワキ
「何が落ちたると申すぞ。

狂言
「鐘が鐘楼より落ちて候。

ワキ 「鐘が鐘楼より落ちたると申すか。

狂言 「中々。

ワキ 「何として落ちたるぞ。

狂言 「随分念を入れて御座るが落ちて候。

ワキ 「別に思ひ合はする事は無きか。

狂言 「それにつき思ひ出でたる事が御座る。最前此國の傍に住む白拍子にあるが。鐘の供養を拝ませてくれよと申した程に。禁制のよし申して御座れば。

舞を舞うて見せ申さうするに依つてと申したにつて見せ申したが。もしさやうの者のわざにても御座あらうずるか。

「言語道断。かやうの義を存じてこそ。固く女人禁制のよし申して候ふに。曲事にて有るぞ。なふく皆々かう渡り候へ。此鐘に付いて女人禁制と申しつるいはれの候ふを御存じ候ふか。

ツレ 「いや何とも存ぜず候。

ワキ「さらば其謂を語つて聞かせ申し候ふべし。

ツレ「懇に御物語り候へ。

ワキ「むかし此所に。まなごの庄司と云ふ者あり。彼者一人の息女を持つ。又其頃奥より熊野へ参詣する山伏の有りしが。庄司がもとを宿坊と定め。いつも彼所にきたりぬ。庄司娘を寵愛の余りに。あの客僧こそ汝がつまよ夫よなんどゝ戯れしを。をさな心に誠とおもひ年月を送る。又或とき彼客僧庄司がもとに来りしに。彼女夜更け人しづまつて後。客僧の閨にゆき。いつまでわらはをばかくて置き給ふぞ。急ぎむかへ給へと申しあかば。客僧大きにさわぎ。さあらぬよしにもてなし。夜にまぎれ忍びいで此寺にきたり。ひらに頼むよし申しあかば。隠すべき所なれば。撞鐘をおろし其のうちに此客僧を隠しあく。さて彼女は山伏を。のがすまじとて追つかくる。折節日高川の水以ての外に

増りしかば。川の上しもをかなたこなたへ走りま
はりしが。一念の毒蛇と為つて。河を易々とおよ
ぎこし此寺にきたり。こゝかしこを尋ねしが。鐘
のおりたるを怪しめ。龍頭をくはへ七まとひ纏ひ。

焰を出だし尾を以てたゞけば。鐘はすなはち湯と
なつて。終に山伏を取りをはんぬ。なんぼう恐ろ
しき物がたりにて候ふぞ。

ツレ「言語道断。かゝる恐ろしきおん物語こそ候はね。

ワキ「其時の女の執心残つて。また此鐘に障礙をなすと
存じ候。我人の行功も。かやうのためにてこそ候
へ。涯分析つて此鐘を二度鐘楼へ上げうするにて
候。

ツレ「尤しかるべき候。

ワキ「水かへつて日高川原の真砂の数は尽くるとも。行
者の法力つくべきかと。

ツレ「みな一同に声をあげ。

ワキ 「東方に降三世明王。

ツレ 「南方に軍荼利夜叉明王。

ワキ 「西方に大威徳明王。

ツレ 「北方に金剛夜叉明王。

ワキ 「中央に大日大聖不動。

地 「動くか動かぬかさつくる。 囊謨三曼多囉日羅南。

旋多摩訶嚕遮那。 婆婆多耶吽多羅吒干鎗。 聽我
説者得大智恵。 知我身者即身成仏と。 今の蛇身
を祈るうへは。

ワキ 「何のうらみか有明の。 撃鐘こそ。

地 「すはく動くぞ祈れたゞ。 く。 引けや手ん手に
千手の陀羅尼。 不動の慈救の偈。 明王の火焰の。
黒煙を立てゝぞ祈りける。 祈り祈られつかねど此
鐘ひゞきいで。 引かねど此鐘躍るとぞ見えし。 程
なく鐘楼に引きあげたり。 あれ見よ蛇体は顯はれ
たり。

地

「謹請東方青龍清淨。謹請西方白体白龍。謹請中

央黃体黃龍。一大三千大千世界の。恒沙の龍王哀愍納受。哀愍じきんのみぎんなれば。いづくに大蛇のあるべきぞと。祈り祈られかつぱとまろぶが。

又おきあがつて忽に。鐘に向つて衝く息は。猛火と為つてその身を焼く。日高の川浪深淵に。飛んでぞ入りにける。望み足りぬと驗者達は。わが本坊にぞ帰りける。く。